地蔵尊の宗教 ㊥

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

高尾山における延命地蔵尊法要

地蔵尊の祭礼

文化庁が毎年発行している『宗教年鑑』によれば、我が国の仏教徒と神道信者の割合は、ほぼ四十七％で拮抗している。仏教と神道の信者数を加えると、日本の総人口のおよそ倍になるという統計もある。このことは多くの人が仏教と神道をともに信じていることを表す。事実、日本人は不祝儀には寺院、祝儀には神社にお参りして疑問を持たない。これに対し、キリスト教徒はいつの時代も一％を超えることがなかった。欧化政策を推進した明治期には内村鑑三など一流のキリスト教徒が現れ、昭和期には著名な作家の遠藤周作などが「だぶだぶの洋服」（＝西欧のキリスト教）を「和服に仕立て直す」努力をしたにも拘わらず、数において日本人のクリスチャンが増えることはなかった。その理由は、一神教が日本人に合わないとか、キリスト教が先祖崇拝を認めないからなど種々に論じられてきているが、宗教と催事が結びついた年中行事のないことも大きい。クリスマス・イブにしても商業を中心として国民に浸透し、若者のデート日の定番ともなっているが、クリスマス当日にキリスト教徒として神に祈りを捧げる人は例外的である。

一方、日本で盛んな伝統的な祭りは、多くが寺院や神社を中心に展開したもので、参加者は信心の深浅にかかわらず参拝・参詣や墓参などの宗教行為を合わせて行う。地蔵尊の信仰もまた、こうした宗教行事によってより広く深く日本人のあいだに浸透していった。その最初期の例が地蔵悔過と地蔵講である。

『延喜式』の記述によれば、嘉祥年間（八四八～八五一）に創建された京都の嘉祥寺では、毎年三月中旬と十月中旬に朝廷で地蔵悔過が開かれたとされる（真鍋廣済『地蔵菩薩の研究』三密堂書店）。悔過とは「過ちを悔い改める」の意味で、自分の犯した罪を仏前に懺悔して滅罪を祈願する儀式をいう。奈良時代から平安前期には、法要の本尊によって地蔵悔過・阿弥陀悔過・薬師悔過・大日悔過・吉祥悔過などが行われた。

地蔵悔過が宮中で栄えたのに対し、庶民のあいだでは地蔵講が行われた。講とはもとは学僧が経典を講義し研究する集会であったが、のちに同じ信仰をもつ人々が念仏したり読経したりする集会を表すようになった。平安期には京都の六波羅蜜寺をはじめ各地で地蔵講が行われ、江戸時代には地蔵講に名を借りた庶民のリクリエーションとして普及したとされる（同前）。

これらの儀礼とともに、日本において宗教と娯楽が融合した行事の典型は

新講社設立

高尾山有喜講 第一回参拝

去る五月二十六日、高尾山有喜講の皆様が、講社結成後初めてとなる薬王院参拝に訪れました。

講元には薬王院の筆頭総代を務められております、落合龍太郎様（下写真前列左から三人目）が就任されました。龍太郎様は父であり、また先代の筆頭総代でもありました、故・落合清氏が生前に熱望されていた「高尾山に新しい講社を設立したい」との想いを継承し、その趣旨に賛同する世話人の方々を集めて新講社設立に至りました。

当日はケーブルカーの山上駅から薬王院までの道中で境内案内を受け、御護摩供修行の前には有喜講先達であります、佐藤秀仁法務課長の法話を聴聞されました。御護摩供修行では、講員の安全と有喜講の歴史が末長く続きますようにと講社の発展を祈念されました。

大本堂内での法話聴聞

高尾山有喜講の世話人の皆様

縁日である。縁日の縁はもっとも古い仏教語のひとつで、全てのものごとは何かの原因や条件に縁って起こると説明された。「縁って起こる」ことを縁起という。そこから特定のものごとと関係の深いことを「縁がある」というようになり、神仏と関係のある日を縁日というようになった。仏教の諸仏諸菩薩には、それぞれ決まった縁日が配され、その日には僧侶が読経し供養した。平安時代末期には毎月二十四日が地蔵尊の縁日と信じられ、地蔵尊と縁のある寺院で法要が営まれた。現代の縁日を見れば、屋台の物売りや見せ物興業を行う娯楽の日のように思われるが、本来は仏菩薩や神々の供養を行う宗教的な日であった。

近畿圏で今なお盛んな地蔵盆は、お盆のある月の二十四日に催された地蔵祭りが起源であると推定されている（同前）。地蔵盆は関東では知る人が少ないが、京都や大阪、滋賀などでは、その日を待ちわびるほどの年中行事となっている。地蔵盆が他の祭礼と異なるのは、その担い手、主体が子供という点である。地蔵盆では祭壇を設け地蔵尊に供え物をし、僧侶が読経するなど、仏教儀礼の要素があるものの、その場に子供たちが集まりお菓子を食べたり遊んだりするのが行事の中心で（林英一『地蔵盆―受容と展開の様式』初芝文庫）、幼い頃から地蔵信仰の心を育むのに大いに寄与してきた。

こうした多様な儀礼・行事とともに深い教えや信仰を持つ地蔵尊は、日本でもっとも人気を博した「ほとけさま」となり、現代に至っている。